民謡紀行

柳原　藤忠
(昭和39年工業化学科卒)

我が故郷、秋田は民謡の宝庫、故郷の唄を訪ね歩く。

◇ひでこ節

仙北地方の有名な御座敷唄だが、元は山菜摘みに行く時の仕事唄であった。「ひでこ」とはユリ科の食用植物「しおで(牛尾菜)」の事で秋田では「ひで」と言い、これに東北方言の愛称「こ」がついて「ひでこ」となった。十七八ナーと唄いだすので娘の事と早合点してて秀子節と表すのは間違いである。

春の山野を思わせる様な、のんびりとした野趣に富んだ曲想である。

○ 十七八ナー　今朝のナー (ハイハイ)
若草(ハイ)　何処で刈ったナ　　コノひでこナー

春の山は若い男女の恋を語り合う場でもあったことから、山の向かい側から沢を隔てて、男女が掛け合いで唄う、恋唄の様なものに変化していった。岩手・青森・秋田では「ひでこ節」「そでこ節」山形では「しょんでこ」と呼ばれ「山の神唄」で山へ人々が入って働く折り、仕事始めに山の神に捧げる祝い唄で、これを唄う事で身の安全を願い、山の神の所有物である草木や動物を採る許可願いとしての唄でもある。本当は神聖な唄なんですね。

◇長者の山

田沢湖周辺の祝い唄で、岩手県岩手地方では盆踊り唄として唄われていた。県境の国見温泉(雫石町)に来る老婆達が、唄を掛け合いで楽しむうちに歌詞が増えて整ったので「婆々唄」とも言われた。

それが仙岩峠を越え生保内の宿場にも伝えられた。田沢湖付近の山で長者が金鉱を掘り当てた時、村人がその長者を祝い、自分達もあやかりたいと願って、慶長の頃から唄い継がれてきた。

○ 盛る　盛ると　長者の山　盛るナ
盛る　長者の山　サーサ　末永くナ
(キター　サッサー　　キターサ)

角館の神明社祭礼の桟敷踊りとなって一般にも広く知られる様になった。なんとなくこの「長者の山」を唄いながら秋田の酒を飲むと、酒が旨いように感じる。

総会での民謡(左：柳原)

◇正調　生保内節

秋田街道の秋田県側最後の宿場町、生保内地方の酒盛り唄として唄われてきた。昔は歌詞から「生保内東風(おぼねだし)」と呼ばれ、三百年も唄い継がれていて秋田民謡の中では最古の曲である。「おぼねだし」とは夏の東風でフェーン(熱風)を宝風として稲にもたらす恵みを唄った米どころらしい唄である。

○ 吹けや　生保内東風　　七日も八日も
吹けば宝風　　ノオ　　稲実る
(コイー　　コイー　　コイコイト)

「生保内節」は、角館の祭礼の桟敷踊りに取り上げられてから、急激に変化し現在唄われているような「生保内節」の様な節回しになった。　秋田で最も古い民謡「正調　生保内節」をもっと唄い広め、後世に伝えなければならないと思う。

◇余談

八郎潟に住む八郎は、田沢湖に住む竜子姫に恋をした。横恋慕であった。竜子には想う人がいた。しかし、八郎は竜子の心を汲み取れず、毎日毎日通い詰めた。通い詰めた跡が「雄物川」となり、秋田平野に恵みをもたらすが、ひとたび怒りを爆発させると、大変な難儀をもたらす、暴れ川になった。これを知った竜子は「御座の石」へ身を投じた。深さ知れない「御座の石」である。

◇秋田おばこ

秋田民謡で最も有名なのが「秋田おばこ」。秋田の文化遺産に指定しても良いのではないだろうか。　秋田・山形地方では、「おばこ」は15～20才位までの番茶も出花の年頃の娘達の事を言う。山形県の「庄内おばこ」が南部へ往復する馬喰達によって持ち込まれた唄で、娘盛りを唄った陽気で楽しい唄である。伴奏の主役は横笛で、これを助けて三味線と太鼓が加わるが「庄内おばこ」の素朴さに比べると、高度の技術が要求される。その「庄内おばこ」が秋田県側で大きく変化したのは、角館の祭礼に演じられる様になってからである。「庄内おばこ」的の唄を「仙北おばこ」として笛中心に編曲し、その後、更に「秋田おばこ」と改名した。

○ おばこナ (ハイ　ハイ) なんぼになる (ハイ　ハイ)
この年　暮らせば　　十と七つ
(ハァ　オイサカサッサ　　オバコダ　オバコダ)

笛中心の編曲のせいもあるが、当時の唄い手は高い声を鍛えて力で押せたが、昭和30年代に入ると「千葉　千枝子」がテンポをゆっくりにし、高い所を避け優しい唄い方に改めて、現在の「秋田おばこ」になった。秋田を代表する「秋田おばこ」。もっともっと唄われていい唄である。いや、秋田の人がもっと唄わなければ、と思う。